

泉州タオル 欧州に挑む

日本のタオル二大産地の一つ、大阪南部の泉州タオルが、この秋、イタリアで国際デビューを果たした。主力商品である手ぬぐいサイズの浴用タオルは日本の風呂文化とともに発展したもので、シャワー中心の海外ではほとんど普及していない。そこで、スポーティーなデザインに一新して売り込みを図っている。

イタリア・ミラノで9月中旬に開かれたインテリア・雑貨の国際見本市「HOMI展」で、ひととき新鮮やかな色彩のタオルが注目を集めた。泉州の業者でつくる大阪タオル工業組合が欧州の流行を意識して試作した「ミラノ10カラー」だ。「浴巾」と呼ばれる縦90センチ、横34センチの大きさのタオル。出展したブースには、外国人の男女モデルがタオルをねじりはちまきやバンドナのように巻き、背中を拭いたり、肩にかけたりしたポーズ写真をちりばめたパネルを掲げた。



欧州の流行色を採り入れたミラノ10カラーのタオル。大阪府泉州佐野市の泉州タオル館

使い道色々 鮮やかにミラノデビュー

佐野市の神藤タオルの神藤貴志社長(29)は「『これはどういうものだ?』『面白い』と反応が良かった」と振り返る。

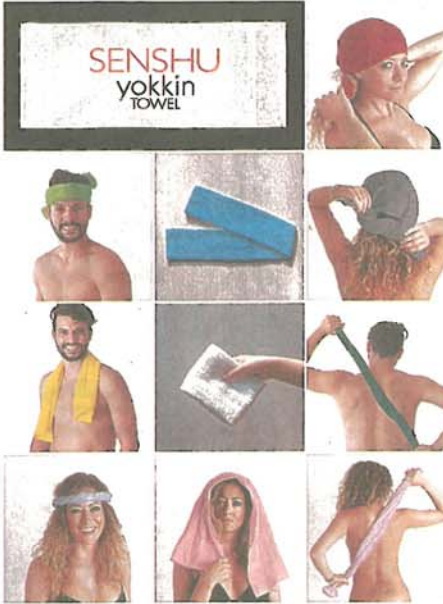
目新しさを訴え

欧州はシャワーが主流で、汗を流した後はバスタオルで体を拭いたり、バスローブを羽織ったりする。国際ブランド化を狙ったデザインプロデューサーの喜多俊之さん(73)は今回、浴用タオルの目新しさをアピールした。「人間の体に合うように考えぬかれたサイズで、折り紙のように色々な使い道がある、とわかりやすくパネルで示すことができた」。外国人の温泉ブームも追い風にしようと、「日本の風呂文化と切り離せないタオル」と歴史の紹介も忘れなかった。

ふわりとした手触りも評価された。出展したタオルを手がけた南泉タオル(泉州佐野市)の神座宏幸社長(57)は「丈夫で、かつ柔らかさを出すため一部に細めの糸を使った」。糸の強度を増すために使うノリも天然素材で、環境にも配慮しているという。

「あらゆるシーンで使える」。あえて欧州ではなじみの薄い「浴巾」で勝負する泉州タオル。大阪タオル工業組合の中沢茂理理事長(67)は「質では絶対に負けていない。世界に誇れるお風呂文化から生まれたタオルに、新たな技術や工夫を加え、世界に売り込んでいきたい」。 (中川竜児)

泉州タオルのPRパネル。使い勝手もアピールする=大阪タオル工業組合提供



触り心地 素晴らしい

日本のお風呂文化を描いた漫画「テルマエ・ロマエ」の作者ヤマザキマリさんの話。この夏、日本からイタリアへ戻る私のスーツケースには2枚のタオルケットと2枚のバスタオルが押し込まれていた。それ以外のものは何も入れられなかったが、そこまでしても日本のタオルを持って帰りたい執念があった。日本のタオルは触り心地といい、吸水性といい、素晴らしい。他の国のタオルでは妥協出来なくなった。イタリアでも日本のタオルが簡単に買えるようになれば、うれしい。

泉州タオル

1887(明治20)年に佐野村(現在の泉佐野市)の里井圓(えん)治郎が製法を開発し、日本のタオル発祥の地とされる。糸を強くするためのノリやロウを漂白するなどして途中で取り除く「後晒(あとさらし)」が特徴。国産のシェアを分け合う今治タオルは「ギフト用」で知られたが、泉州は企業が社名を入れて顧客に贈る「ノベルティー用」が多く、知名度は低かった。ブランド化を進め、近年は泉佐野市のふるさと納税で人気の謝礼品になっている。